

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)  
 研究期間： 2007～2009  
 課題番号： 19601001  
 研究課題名 (和文) 英語教育におけるプログラム・デザインのモデル化：ヨーロッパ共通言語参照枠の応用  
 研究課題名 (英文) Constructing a model for program design of English courses : Applications of CEFR  
 研究代表者  
 村中 知子 (MURANAKA TOMOKO)  
 茨城大学・人文学部・教授  
 研究者番号： 30091755

研究成果の概要 (和文)：本研究では、Common European Framework of References (CEFR)を日本の大学における英語教育のプログラム構築にどのように応用するのか、その応用方法を茨城大学における英語教育改革の事例を基に示した。

研究成果の概要 (英文)： This research demonstrated the ways to adapt CEFR to the curriculum development in the Japanese University context based on a case study of curriculum reform of Ibaraki University.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1, 200, 000	360, 000	1, 560, 000
2008 年度	700, 000	210, 000	910, 000
2009 年度	500, 000	150, 000	650, 000
年度			
年度			
総計	2, 400, 000	720, 000	3, 120, 000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：大学改革・評価

キーワード：英語教育、CEFR、ELP、カリキュラム・デザイン

### 1. 研究開始当初の背景

日本の英語教育に関しては、教育界や産業界などから、学習期間が長いにもかかわらず「使える英語」力がついていないことが指摘されて続けてきた。しかしながら、これまで大学での英語教育は多くの場合担当者個人に任せられたままで、体系的な英語教育プログラムの構築方法が具体的に検討されてきていないからであった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、CEFRを参考にして構築した茨城大学の教養英語プログラムを多角的視野から検証し、その事例研究に基づき、大

学における英語教育のカリキュラム構築法を提案する。

### 3. 研究の方法

- (1) 茨城大学の教養英語プログラムの検証：茨城大学では、平成 14 年度から教養英語改革に取り組み、ヨーロッパ言語共通参照枠に基づく抜本的な教養英語改革を行った。この改革の目的と方法、及び経緯を詳細に記述し、カリキュラム改革に必要な検討事項、組織等を検証する。また、日本の高等教育におけるカリキュラム改革の問題点の検証

(2) ヨーロッパにおける CEFR の活用状況及び問題点の調査：  
ヨーロッパ評議会 (Council of Europe) の言語教育政策部門 (Language Policy Division) のアドミニストレーターである Johanna Panthier 氏とヨーロッパ近代言語センター (European Centre for Modern Languages) の副ディレクターである Suanna Slivensky 氏からの聞き取り調査

(3) CEFR に基づいて構築された言語カリキュラムの実態調査：  
ローザンヌ大学、ベルリン自由大学、チュエルナム外国語センターで CEFR がどのように応用され言語カリキュラムが構築され、実施されていたのかの調査および意見交換

(4) CEFR の活用事例研究調査：  
CercleS セミナーに参加し、ヨーロッパ各国で実施されている CEFR に基づく言語教育の実践事例調査および意見交換

(5) 上記の調査や茨城大学における教養英語教育のカリキュラム改革の事例研究を元に日本における CEFR の応用可能性についての考察

#### 4. 研究成果

(1) 世界に通用する英語教育カリキュラム構築の必要性

21 世紀は知識基盤型の社会との認識が広まり、高等教育の果たすべき役割に多大な期待がよせられている。また、e ラーニングを通して、教育のボーダーレス化が進み、教育も国際競争の時代に突入したと言える。このような変化に伴い、高等教育改革が世界各国で急速に進展している。

ヨーロッパでは世界に通用する高等教育制度を確立するために、ヨーロッパ各国の高等教育制度を標準化し欧州における高等教育圏構築を目指すボローニャプロセスが進展中である。また、欧州評議会の言語教育政策を推進するために、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) が 2001 年に策定され、CEFR に基づいた現代語教育のカリキュラムがヨーロッパ各国で開発され、実施されつつある (Council of Europe 2002, Morrow 2004)。さらに、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を基に高等教育用のヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP) が 2002 年に 2 種類作成された。これらは、ヨーロッパ全域で比較可能な高等教育の現代語のカリキュラムや評価基準及び評価方法を開発し、教育水準を保証するためのものである。

アメリカ合衆国においても、このようなヨ

ーロッパの言語教育の動向を受け、2005 年より、言語教育の積極的な推進を図るため、ヨーロッパ言語ポートフォリオのアメリカ版ともいえる LinguaFolio を策定し、5 つの州で試験的使用が始まっている。

一方日本では、2009 年度に大学進学率が始めて 50% を超えた。さらに、大学志願者全員が統計上大学へ入学できる、いわゆる全入時代を迎えようとしている。日本の高等教育は大衆化し、学生の学力低下が深刻な問題として指摘されている。

このような国内外の教育環境の変化を受け、文部科学省は、2008 年 9 月に「中長期的な大学教育の在り方について」中央教育審議会に諮問を行い、2008 年 12 月に、「学士課程教育の構築に向けて」と題する答申を得た。答申では、上記のような世界の教育改革の動向および国内の高等教育の課題を踏まえ、大学教育の質を保証し、世界に通用する評価基準の策定と、それに基づく各分野のコアカリキュラムの構築を求めている。なかでも注目すべきは、各分野の学習の評価基準は、学習成果が明確に分かるように、具体的かつ明示的に記述し、広く公開するように求めていることである。

今日本の高等教育機関に必要なことは、世界に通用する学士課程英語教育カリキュラムの構築であるように思われる。ただし、そのためには、Council of Europe (2001) が苦言を呈しているように、既存の言語プログラムメニューを模倣するのではなく、カリキュラム策定に必要な項目を真剣に検討し、その結果を基に学士課程の英語カリキュラムを構築すべきである。低下したとされる英語力を向上させ、学士課程の英語教育の質を保証するためには、個々の授業担当者の努力だけでは、実現不可能であり、大学全体として組織的に取り組む必要がある。

(2) 学士課程教育における英語カリキュラムの構築のために

日本の英語教育に関しては、教育界や産業界などからこれまで多くの問題が指摘され、多様な教育方法が提言されてきた。しかしながら、長い英語学習にもかかわらず「使える英語」力がつかないことが嘆かれたとはいえ、小学校から大学までの英語教育を通観的に視野に入れた日本の英語教育のあり方が、実質的に検討されてきたとはいいがたい。それは、ひとえに、英語教育の理念と目標、およびその目標を達成するための具体的な到達目標が設定され、そのための方法が構築されてこなかったことに起因する。教育成果を挙げるための即効的手段は、残念ながら、ない。ある特定の外部テストを基準にした大学英語教育が盛んに行われている現在であるが、世界に通用する英語教育を実施するために

は、英語能力を多角的に伸ばすことができる英語教育システムを構築することが急務である。

このような状況の中、2008年12月に提出された中央教育審議会答申は、21世紀の知識基盤社会への対応や教育のグローバル化、そして国内の高等教育の大衆化問題に対応するために、日本の学士課程教育の構築が喫緊の課題としている。さらに、国際的な大学教育改革の動向は、「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」という学生が修得すべき学習成果を具体的かつ明確化することに重点が置かれていると報告している。また、日本の高等教育の現状として、日本の学士が、どのような能力を証明するものかを大学は明確に示しておらず、また、国も、これまでに大学の教育改革に積極的に関わろうとしてこなかったと苦言を呈している。このような状況を打破するために、中央教育審議会は、大学教育の具体的な改善方策として、「学部・学科等の教育上の目的、学位授与の方針を定め、それを学内外に対して積極的に公開することとし、その際には、国際的な動向に習い、教育の目的や学位授与の方針が「抽象的な記述にとどまらず、学生に身に着けることが期待される学習成果を重視する観点から、具体的で明確なものとなるように努める」としている。

学士課程教育における英語教育プログラムを構築するためには、まず、それぞれの大学が大学の教育理念と目標に基づき、まず、総合英語プログラムで策定したような Can-do Statements を使用した明確な到達目標を作成する必要がある。このような到達目標を策定するためには、2.1 で述べたように、それぞれの大学がどのような領域のどのような言語活動を通して、英語教育の目標を達成するのかを検討する必要がある。具体的で明確な到達目標が策定されれば、それに基づき、シラバスを作成し、教育内容、教材、評価方法を一体的に検討し、決定する必要がある。そして、構築された教育プログラムを実行し、点検評価し、さらなる改善へとつなげる PDCA サイクルを稼働させる必要がある。この一連のプログラム構築のプロセスを図式化すると以下ようになる。

#### 学士課程における英語教育プログラムの構築

教育理念・目標の設定

↓

英語能力記述尺度による到達目標の設定

↓

シラバス、教育内容、教材、評価方法の策定

↓

英語教育システムの点検評価

このような学士課程における英語教育プログラムを構築するためには、個々の英語の授業を担当する教員の貢献が前提になるが、それ以上に、大学全体で取り組むために、学士課程教育全体の責任者、例えば学長や教育担当副学長などのリーダーシップが欠かせない。これまで、大学の教育は、個々の授業者の努力に大きく委ねられてきた。しかし、学士課程教育における英語教育プログラムのあり方を検討し、学士課程教育の一部を担う英語教育プログラムを構築し、実行するためには、様々な役割を果たす人々が協同して取り組む必要がある。このような課題に取り組むためには、Wiles(2009)が主張するように、カリキュラムリーダーの存在が欠かせない。さらに、個々の大学が協力して、日本の学士課程における英語教育モデルを構築することも重要なことのように思われる。それぞれの大学には、様々な建学の理念や教育方針があるが、日本の学士課程教育の英語教育を考える上での共通の枠組み作りが必要だと思われる。

以上の観点から、我が国における教育答申の歩みをもとに、国立大学における具体的な英語教育プログラム・デザインをめざして、3年間にわたって研究し、成果をえた。その詳細に以下に示すとおりである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4件)

##### ①村中知子

「国立大学における教育プログラム・デザインの有する意義——二つの英語教育改革の事例」『茨城大学人文学部社会科学論集』第50号 2010年9月刊行予定

##### ②永井典子

「総合英語プログラムの全学導入と新たな挑戦」、『授業デザイナー—学習空間づくりの教授法と実践』英語教育学大系第11巻 大修館書店 2010年刊行予定

##### ③永井典子

“Can do lists in Ibaraki University Integrated English Program”, *Conference Proceedings of JALT 2009*. (to appear)

##### ④永井典子

“Using the CEFR for the development of the Integrated English Program curriculum at Ibaraki University” PAC 7 *JALT 2008 Conference Proceedings*. 539-540. 2008

[学会発表] (計 3件)

##### ①永井典子

“Can do lists in Ibaraki University Integrated English Program”、JALT 2009、

静岡コンベンションアーツセンター・グラン  
シップ（静岡）、2009年11月21日。

② 永井典子 “Using the CEFR for the  
development of the Integrated English  
Program curriculum at Ibaraki  
University” PAC7 at JALT2008 Conference、  
国立オリンピック記念青少年総合センター  
（東京）、2008年11月2日。

③ 永井典子 「大学英語カリキュラムの現状と  
未来：異なる教育組織からの展望」JACET 第  
2回関東支部大会、立教大学（東京）、2007年  
6月24日。

〔その他〕

ホームページ等

[http://languageawareness.hum.ibaraki.ac  
.jp/CEFR/index.html](http://languageawareness.hum.ibaraki.ac.jp/CEFR/index.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村中 知子 (MURANA TOMOKO)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：30091755

### (2) 研究分担者

永井 典子 (NAGAI NORIKO)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：60261723

福田 浩子 (FUKUDA HIROKO )

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：60422177